

アウグスチヌスの神体験における 自己存在の理解

——存在の根源的理解への開け——

今 義 博

この論文の意図は、アウグスチヌスが最初の神体験⁽¹⁾を通して如何にして、又どのようなものとして自己存在の理解を獲得したか、又更にそのような自己存在の理解からどのようにして人間存在一般への理解が開かれたのかを考察することである。

アウグスチヌスの神体験は『告白』第7巻第10章16節で次のように書き出される。「そこで私はそれらの書物から自分自身に立ち返るようにと勧められて、あなたに導かれながら心の内奥⁽²⁾に入って行きました。」ここで「それらの書物」とは新プラトン派の著作⁽³⁾を指しているが、その読書を直接の切っ掛けにして彼はまず自己自身に帰還⁽⁴⁾し、それによって更に神を認識するに到った。この自己帰還 *redire ad se ipsum*⁽⁵⁾こそは彼の神体験のための前提要件であった。彼を自己帰還へと導いた理由は何か。アウグスチヌス自身は「助け主」*adiutor*⁽⁶⁾としての神を究極の理由と考えているが、その外、上述の如く新プラトン派の著作との接触も一つの理由である。

しかし新プラトン派の著作を読む者凡てが自己帰還を成し得るわけではない。自己帰還という極めて主体的な行為を十分に遂行すべき内的事情としての理由が考えられねばならない。それは要約すれば、神を求めて止まぬ情熱的な探究心を持続しつつもその方法的欠点の故に彼の努力が壁に突き当たっていたという事情⁽⁷⁾が彼にその行き詰まりを打開すべき新しい方法を要求していた、と言えよう。そこで、自己帰還の意味を理解するためにも、神体験以前に彼の神探究⁽⁷⁾を行き詰まらせていたその思惟方法はどのようなものであったかを考察しておきたい。

自己帰還が「自己自身の内へ立ち返る」ことであるのに対し、自己帰還する以前⁽⁸⁾のアウグスチヌスの思惟態度は定式化すれば「自己の外へ向かっていく」*foras ire*という性格をもっていた。そのような性格を有する心の働きを彼は『告白』の神体

験の叙述に関連的に先立つ部分では cogitare⁽¹⁰⁾ (思考する) というラテン語で特徴的に表現しているので、この言葉を手掛りとして彼の思惟態度を検討して行く。

cogitare とは概ね、外界の物的事物に対する感覚的認識によって得られた心象 *imagines* や表象 *phantasia*, 更にはそれらに基づきながらも対応する外的實在を欠く空想 *phantasma* や幻想 *phantasmata* などの諸観念⁽¹¹⁾をもとにしてそれらを組み合わせ、変形・比較・抽象等をして概念を構成することである。この思考作用の特質はアウグスチヌスに従えば、①思考された概念の物体性、②思考する仕方の場所的空間性、③思考作用の外的指向性などに要約されよう。以下神と無と自己を具体例にとって思考という思惟方法を吟味する。

「群がる幻想は追い払われるや、まあどうでしょう、またたく間に再び一群となって現われ私の眼の中に乱入して来て眼を曇らせてしまうのでした。そのため私はあなた(神)を人間の身体の形によってではないにしても場所的空間に於いて何か⁽¹²⁾ 物的なものと考え(cogitare) ざるを得ませんでした。」

神は思考される場合、「何か物的なもの」*corporeum aliquid* として物体性を有する概念となり、しかもそれは「場所的空間において」*per spatia locorum* 指定される。又別の箇所では「私は自分の精神の眼前に全被造界を構成してみました。即ち地・海・空気・星・樹木・死すべき生き物のように肉眼で見分けられる凡てのものと、天上界やそこに住む凡ての天使や靈的存在のように見ることのできない凡てのものを含めて。しかしこれら見ることのできないものをも物体であるかのようにそれぞれの場所に置いて想像してみたのです。」⁽¹³⁾とも語られる。

「精神の眼前に構成する」*constituere in conspectu spiritus* という想像 *imaginatio* は所謂表象作用に相当するが、これも cogitare の一種である。非物体的・靈的存在である神や天使も思考される限り常に何らかの物体として場所的空間において指定される。又そのように思考されたものは屢々物的事物とのアナロジーで説明され理解される。従って神の思想的認識は、神の在り方に反している限り、根本的に神忘却とならざるをえない。

次に無 *nihil* を思考する場合を引用しよう。「そのような空間を取り去ったものは何であれ無であると思われました。それは完全な無であって決して空虚といったものではない。つまり物体が場所から取り去られるとあらゆる物体が、地も湿った

ものも気体も天体も空^{から}になった場所だけが残り、それは言わば空間的な無とでも言うべき空虚な場所となるでしょうが。⁽¹⁴⁾」

「空虚な場所」locus inanis 乃至「空間的な無」spatiosum nihil は物体性が否定された後に残る場所的空間を意味するが、それはまだ「完全な無」prorsus nihil ではない。無とは寧ろ物体性のみならず場所的空間性そのものも捨象した後に想定される概念である。このように無は物体性と場所的空間性の否定として殆ど思考不可能な概念であり、思想的立場そのものの否定と一見思われ易い。しかしながら無概念の内包する否定性は、単に物体性と場所的空間性の裏返しにすぎない。それ故無概念の成立地盤は思想的立場に在る。無は思考される限り、消極的ながらも物体性と場所的空間性において把えられており、思想的認識の次元を出るものではない。後述される自己の根源としての無とは質的次元的に異なる。

精神としての自己を思考する場合、思考された自己は精神の眼前に何らかの物体性を有する像として主体の向こうに場所的に措定される。抑々、思考作用は一般に主体と対象との分離を惹起し、対象は主体にとって対向的他者となる。思考された対象的自己も主体的自己にとっては寧ろ他者となる。しかも物体化された自己は本来非物体的な自己から遙かに遠い。それ故思想的立場では自己は自己に真に関わり得ず、自己存在は真に問題化し得ない。自己の思想的認識は寧ろ根本的自己忘却である。「このようにして私は心が鈍り、自分で自分自身をすら見通すことができな⁽¹⁵⁾かった」と言われる所以である。

以上の如く、思想的認識は物体性と場所的空間性を特質とするが、それらの特質は元来外的物的世界に属すものである。思想的認識は外界の在り方にその根を持ち、常に外界と関連する。たとえ如何に内的乃至靈的存在に関した思考であれ、思考作用である限りは外界との連関を有する。それは単に外界とのアナロジカルな思考において見られるのではなく、思考作用そのものに内在的な本質的傾向である。それを思考作用の外的指向性と呼ぶことができよう。

総じて思想的認識には物体性・場所的空間性・外的指向性等の特質が在るが、それは神や自己に関しては寧ろ神忘却・自己忘却を招来する。それ故思想的立場に立ったアウグスチヌスの神探究は行き詰まらざるを得なかった。今や思想的立場を克服した新たな認識方法が開拓されることが必要である。

それは次のようにして開始された。「自分が生きていることを知ると同様に意志をもっていることも知っている、ということが私をあなた（神）の方に引き上げてくれた。⁽¹⁶⁾」

これは新プラトン派の著作に接する以前のアウグスチヌス自身による自己帰還の第一歩であったと見ることができる。ここに見られる認識の仕方はもちろん感覚的認識でもなく、⁽¹⁷⁾ 思想的認識に属するものでもなく、それらとは質的次元的に異なる内的認識に属する。この認識は心象や表象を媒介とせず、場所的空間に於いて措定することもない点で非物体的無媒介的であり、推理・比較・抽象などを要せぬ点で理性的というよりは直観的である。又、精神としての自己が専ら自己の内⁽¹⁸⁾で自己を直接に知るという点で外的指向性を持たず内的・自己同一的である。ここに自己は自己自身に帰還する。しかも思想的認識との最も重要な相違点は、思想的認識が高々事実の認識にあるに対し、この内的認識は真理の認識に属する点である。「自分が生きていることを知る」という内的自己直観は事実の認識であると共にその不可疑性・確実性・明白性において真理の認識に属する。単なる事実認識には可疑性が残るが、自己の存在の事実の認識はそうした事実認識を越えている。とはいえそれは十全な真理の認識ではない。なぜならそれは真理そのものの認識ではないから。

又この内的自己直観はそれ自体としても限界を有する。というのはアウグスチヌス自身屢々嘆く如く、⁽¹⁹⁾ 人間の内には自分にさえ知られぬ部分があり、確実な内的自己直観といえども部分的自己直観にすぎず、又内的自己直観は、それだけでは自己が如何にあるべきかという認識をもたらすものでもなく、自己と他者特に神や真理との関係を知らしめるものでもない。このように見ただけでも内的自己直観は単に自己直観に留まる限りは、自己存在の十分な認識ではなく、寧ろ根本的には自己忘却を結果する可能性がある。それ故自己を十分に把握するために、又自己を超越する神を認識するためにも、自己を越えた視点が獲得されねばならない。が、その超越はどこに求むべきか。もはや自己の外には求むべくもない。それは更に深い自己忘却を招来するばかりである。それ故内的自己直観における如き自己自身への直接的関わりを保持しつつ更⁽²⁰⁾に自己の内に超越的視点を得るの⁽²⁰⁾でなければならぬ。内的自己直観は真理の認識に属していたが、正しくこの点こそは内的自己超越の方途を暗示する。

実際アウグスチヌスは自己帰還によって内的自己直観に達し、更に真理へ向かって自己の内に自己を超越する道を歩み、神に出会ったのである：「そこで私はそれらの書物から自分自身に立ち返るようにと勧められ、あなたに導かれながら心の内奥に入ってゆきました。……私はそこに入って行き、何かしら魂の目のようなものによって、まさにその魂の目を越えたところに不変の光を見ました。……真理を知る者はこの光を知り、この光を知る者は永遠を知る。」⁽²¹⁾

ところで新プラトン派がアウグスチヌスに勧説したことは自己帰還の方法だけではない。同じこの神体験を叙述した別の箇所でも「私はそれらプラトン派の書物を読み、それによって非物体的な真理の探求を勧められた。」⁽²²⁾と述べている。彼は自己帰還と真理探求の勧めに従って内的に自己を超越して神的光に触れ得たのである。

「真理を知る者はこの光を知る」と言われるが、では彼は具体的にどのようにして真理を見出し神的光を知ったのか。『告白』第7巻第17章23節はその事情を語っている：「実際、天上のそれであれ、地上のそれであれ、物体の美しさを評価するのは何によるのであろうか。可変的なものについて『これはこう在るべきだ、それはそう在るべきではない』と正しい言明や判断ができるのは、自分の内に何が具っているからであろうか。このような判断を下す場合、何に基づいてするのかと尋ねてみて、可変的な自分の精神の上に不変で真実で永遠の真理を見出したのです。」⁽²³⁾

「これはこう在るべきだ」とそのものの存在すべき在り方を指示する判断は所謂一般的な命題的判断と異なる。寧ろ裁定乃至裁断である。そのような判断者は被判断者に対して存在の仕方を指令する権限を有する者として、存在の秩序において被判断者の上位に立つ。しかし判断は判断者の恣意に委ねられてはいない。判断の実行可能性の根拠は判断基準に在る。判断基準への従順が判断の実現を可能にする。しかも判断基準は決して判断され得ない。ただ見出されるだけである。判断者は判断において判断基準の従者にすぎない。それ故判断基準は判断者の上位に立つ。

ところで、一般に判断についてはその真偽が根本的問題である。裁定としての判断内容の真偽の決定は根本的には、判断対象との適合性ではなく、判断基準との適合性に依存する。判断内容の判断対象に対する適合性自体も判断基準に基づいてその正否が決定されるからである。ある判断が真たり得る根拠は判断基準に在る。判断基準が判断を真たらしめる。真なるものを真たらしめるものこそ真理であるが

故に、判断基準とは真理である。⁽²⁵⁾

真理たる判断基準は何処に在るか。真理は判断者の精神の内にもみ出される。確かに真理は人間の精神に現われ住む。⁽²⁶⁾しかし上述の如く真理は判断基準として精神の上に位する。「可変的な自分の精神の上に不変で真実で永遠の真理を見出したのです。」と語られた真理は精神に現われ住むといえども、真理自体は精神を超越している。それ故アウグスチヌスは自己の内に、しかも自己を越えて真理を見出す。そしてその時真理そのものから精神に照明された光が神的光であった。

「私が見た光は私を造ったが故に私の上に在り、造られたが故に私はその下に在った。⁽²⁷⁾」真理の自己超越性は存在の連続的系列の秩序において考えられてはならない。真理は創造者として被造物たる自己との存在的断絶において超越的に自己の上に位する。

この神的光との出会いはアウグスチヌスに何を知らしめたか。「はじめてあなたを知った時、あなたは私を引き寄せて、見るべき者がある、だが私はそれを見る者としてはまだ存在していないことをお示しになった。⁽²⁸⁾」彼は神的光の直観において「見るべき者が在る」esse, quod viderem 即ち神が存在する事と、彼自身がそれを見ることのできる者としてはまだ存在していない nondum me esse, qui viderem という事、つまり神と自己とに関する二つの認識を同時に得たのである。

自己に関して「私はまだ存在しない」nondum me esse ということは「私は存在しない」non me esse 即ち自己の非存在 non esse を含意する一方、同時に「まだ存在しない」者として「私は存在する」me esse こと即ち自己の存在 esse も含意する。つまり神の前で、自己は存在しつつも存在しないこと、即ち自己の esse と同時に non esse が明らかにされたと言える。換言すれば自己存在とは非存在を含む存在ということになる。ただ非存在とは存在しない何らかの物である訳ではないから、「非存在を含む存在」と言っても非存在というものを含んでいるのではなく寧ろ欠除的存在という意味でそう表現する。この自己存在の内なる欠除・非存在こそは「見るべき者」をまだ見ることのできない原因である。自らの内に如何なる非存在をも含まぬ完全な存在である神の前で、自己存在の内なる非存在は自己の弱さ infirmitas として、又神との不類似性 dissimilitudo として自覚される。「そして激しい光線をあてて弱い私の視力をつき離されたので、私は愛と恐れにわななきまし

た。そしてあなたから遙かに隔たり不類似の境地に居る自分を見出しました。」⁽²⁹⁾

自己存在の神との不類似性は神からの存在的断絶を意味する。自己存在は神から遙かに遠い *longe me esse a te*。とはいえ、神は自己に存在を与え、自己を生かす者である。非存在を含む自己存在全体はひとえに神の恵みにかかっている。神は恵み深い存在である。神への接近は自己存在の内なる非存在の故に遙かに遠い道程であっても、自己存在という神の恵みを感謝することによって自己は神へと向かわねばならぬ。彼は言っている。「その時遙かに高い所から『私は大人の食物だ、成長して私を食べられるように成れ。食べるといっても、肉体の食物のようにお前が私を自分の体に変えるのではない。逆にお前が私に変わるのだ』という御声を聞いたように思いました。」⁽³⁰⁾ 神に接近し神の恵みを享受し得るのは、神を自己の側に引き寄せることによってではなく、逆に自己の全存在を挙げて神の方へ向かうことによってである。しかしながら神の前では自己の無力を知るばかりである。自己は余りにも弱い存在である。「そこで私は不義の故にあなたが人間を懲らしめ、自分の魂をあたかも蜘蛛の糸のように儻く消してゆかれるのを感じて『真理は無ではないか。それは有限の空間にも無限の空間にも広がっていないのだから』と言いますと、あなたは遙か彼方から『とんでもない、私こそは在りて在る者だ』と叫ばれました。」⁽³¹⁾

ここで「真理は無ではないか。それは有限の空間にも無限の空間にも広がっていないのだから」という箇所は問題である。アウグスチヌスが「真理は無ではないか」と疑問を提示する立場は明らかに物的思考の立場である。彼は無を再び有限の空間にも無限にも広がっていないものとして思考しているからである。しかし彼は既に思想的立場を克服してしまったのではなかったか。その克服によってこそ自己に帰還し更に神的光を見ることができたのではなかったか。何故ここで物的思考が再現したのか。思想的立場の克服は不十分なものだったのではなからうか。我我はこれまでの思想的立場の克服を総括的に反省しておく必要がある。

注意すべきは、ここに示された物的思考は専ら無に関する点である。そのことはその克服の不十分さは無に関係していることを窺わせる。逆に言えば、これまでの思想的立場の克服は存在の側面におけるそれであって、無の側面においては未遂行のまま残されていたと言えよう。しかし孰れにしろ、その克服が不十分ならばそれに相応した結果を産むに違いない。事実我々はアウグスチヌスの神体験の第

一段階においてその点を指摘できる。一つは神の自己開示に関して指摘される。最初神は「見るべきものが在る」と啓示され、後に「私は在りて在る者である」と啓示される（後述の如く）。前者の「見るべきもの」とは「アウグスチヌスが見るべきもの」ということであり、神はそこでは彼の見るべき目標として彼にはまだ暗い存在である。一方後者の神の自己開示は前者に比して端的明瞭である。前者が後者より不十分な内容であることは言を待たない。第二は、自己存在の認識に関して指摘される。最初の神の自己開示と同時に「私はまだそれを見得る者としてはまだ存在しない」ということが示され、非存在を含む存在としての自己存在が認識された。この自己存在の内なる非存在は、自己がそこから神によって創造された所の無を暗示する。その意味ではこの無は存在の根源である。この根源的無の認識による自己存在の理解は、非存在を含む存在としての自己存在の理解以上に深い。しかしここではまだそのような根源的無は自覚されない。以上の点は思想的立場の克服の不十分を物語るものであろう。

それにしても無だけがその克服の陰に残存した理由は何か。それは一つには思考された無概念自体の性格に在ると思われる。既述の如く思考された無とは物体性と場所的空間性の否定の上に想定される概念であるが、この概念の内包する否定性は思想的立場そのものの否定と見誤られ易い。しかも神体験の第一段階即ち、まだ無が自己存在の根源的問題となっておらず、無以前の非存在が自覚されたに過ぎない段階では、無に関して思想的立場を克服する必要がなかったであろう。

しかし今や完全な意味で思想的立場を克服しなければならない。「真理は無ではないか」という神の前での疑問提示はまさにその克服のために必要であった。彼がそのように言ったその時その瞬間に思想的立場は完全に克服され、神はより明瞭に知らされたのである。「あなたは遙か彼方から『とんでもない、私こそは在りて在る者だ』と叫ばれた。」ここに神は自らを「私は在りて在る者だ ego sum qui sum」と開示した。今アウグスチヌスには神の存在は何にも勝って明白・確実で疑い得ない。神の存在についての暗さは一挙に払い消された。「その声をまるで心に聞くように聞いたのです。そして疑いの余地は無くなったので、造られたものを通して悟られ明らかに知られる真理の存在を疑うよりは寧ろ自分が生きていることを疑う方が易しかったです⁽³²⁾。」

今、神の存在の確実性の前に自己の生存は寧ろ疑い易いものとして現われてくる。神の前で自己の生存の確実性は薄らぐ。この事態は何を意味するのか。自己の生存の確実性は自己存在の確実性に基づく。では自己の生存の確実性の薄らぎは自己存在の内なる非存在に起因するのか。非存在は存在を脅かすからである。既述の如く確かに自己存在の内なる非存在は神の前で弱さ・神との不類似性として自覚された。しかしその非存在の自覚のレベルはこの自己の生存の不確実性の自覚のレベルとは異なる。前者のレベルでは神は「見るべき者」たる目標であり、その存在は未だ暗く、しかも無に関して思考的立場は未克服である。それに対し後者のレベルでは、神は「在りて在る者」たる現実であり、その存在は既に明らかで、しかも思考的立場は完全に克服されている。従って、後者のレベルで生じた自己の生存の不確実性の原因を前者のレベルに属する自己存在の内なる非存在に求めるのは適当でない。それ故、その原因は非存在を含む自己存在全体の更に根底に求むべきであろう。恐らくその原因は無、即ち自己存在がそこから存在せしめられた所の自己存在の根源たる無に在るのではないか。無は如何なる意味でも存在せぬが故に最も深い所から存在を脅かすからである。この無が自己の生存の不確実性を引き起こしたとすれば、そこにはアウグスチヌス自身の無の自覚が在ったに違いない。「在りて在る者」としての神との出会いにおいて、無に関して思考的立場を克服した時、同時に彼は自己の根源としての無を垣間見たのではないか。自己の生存の不確実性はこの根源的無の認識によってこそ真に生起し得るであろう。

このように、神体験はアウグスチヌスに神と無の認識をもたらしたと解釈できる。神と無とは自己がそれによって・そこから存在せしめられた所の根源であるが故に、神と無との認識は自己存在の根源の認識である。しかもそれは同時に自己存在の根源的認識でもある。何故なら、神と無との根源の認識は自己存在との直接的関わりにおいて得られた自己存在の根源の認識だからである。従って彼は神体験において自己存在の根源的理解を獲得したと結論できよう。

ところで神と無はただ自己存在の根源であるのみならず、人間存在一般の、更には被造物全体の根源でもある。それ故神と無との認識は自己存在の根源的理解を獲得せしめるに留まらず、人間存在一般の、更には被造物全体の根源的理解の地平をも同時に開くであろう。

事実、神体験に引き続く次の叙述はその事を明らかに証明している。「それから私はあなたの下にある他のものを眺めて、それらのものが完全な意味で存在しているのではなく、全然存在していない訳でもないことを認めました。確かに存在はしている。なぜならそれらはあなたによって存在するのですから。にも拘わらず存在しません。なぜならそれらはあなたが存在するのと同じものとして存在するのではないのですから。実際、真の意味で存在するのは不変に留まる者だけ⁽³³⁾です。」

神体験を経たアウグスチヌスには今や、人間存在を含めて被造的世界の一切の存在者の存在に関する理解の地平は開かれた。更にこの叙述に続いて、善と存在、悪と存在、神の無限性、被造的世界の有限性及び時と永遠、被造的世界の適合性及び不義と意志、等々の問題に関する彼の基本的思想が展開されていく。⁽³⁴⁾

註

引用文中の(), ……は筆者記入。

- (1) *Bibliothèque Augustinienne* 第13巻 (1962年)〔以下 B.A. (13) と略記〕に収められているアウグスチヌスの年譜 (p. 205) によれば、彼の最初の神体験は386年5～6月の出来事であった。この神体験はキリスト教への回心 (386年8月) 以前に新プラトン派の強い影響のもとに成ったという点で様々な限界が見られるが、それでも彼が体験した神はキリスト教の神であり、彼の思想全体の基本的出発点を確立するものであった。プロティノスとアウグスチヌスの神体験については、J. Hessen, *Augustins Metaphysik der Erkenntnis*. (2 Aufl. 1960) p. 181 以下及び p. 190 以下参照。
- (2) 「それらの書物から」と訳した部分は原文では《inde》である。《inde》という語は引用された箇所直前の *Confessiones* (以下 *Conf.* と略記) VII, 9, 13-15 で言及されている「ギリシャ語からラテン語訳されたプラトン派のある書物」(quidam Platoniorum libri ex graeca lingua in Latinam versi) を受けている。
- (3) *Conf.* VII, X, 16. Et inde admonitus redire ad memet ipsum intravi in intima mea duce te et potui.
- (4) B.A. (13) の A. Solignac の Introduction, pp. 100-112; 145-149 と註25, p. 682. 及び山田晶訳『告白』(世界の名著14, 中央公論社) p. 235 の註(1)を参照。*Conf.* VIII, 2, 3 によればアウグスチヌスの読んだ新プラトン派の著作のラテン語訳者はマリウス・ウィクトリヌスであった。

- (5) 自己帰還 (*redire ad se ipsum*) は *Conf. VII. X, 16* の «*Et inde admonitus redire ad memet ipsum intravi in anima mea.....*» の表現に由来するが、*De vera religione XXXIX, 73* では «*in teipsum redi*» とあるから «*redire in se ipsum*» とも定式化されよう。自己帰還については、他に *In Johannis Evangelium tractatus XXIII, 10*; *Sermones CCCXXX, 3.* など参照。
- (6) 註(3)の引用に続く部分に「それができたのはあなたが助け主になってくださったからです。」*Conf. VII, 10, 16,....., quoniam factus es adiutor meus.* とある。又 *Conf. VII, 8, 12* で「あなたは、内なる眼で確実にあなたを見るまでは安心できないように、内的な刺で私を駆りたてたもうた。」*et stimulus internis agitabas me, ut inpatiens essem, donec mihi per interiorem aspectum certus esses.* とも述べている。cf. *Conf. VII, 20, 26*; *De libero arbitrio, II, 16, 41.* 一般的にアウグスチヌスは自分の行為や生存の究極的根拠を神に置く。
- (7) cf. *Conf. VII, 1, 1 ~ 7, 11. ibid. 14, 20.*
- (8) *De vera religione XXXIX, 72.* *Noli foras ire, in teipsum redi;* (外へ行くな、汝自身の内へ帰れ。)
- (9) 特に *Conf. VII, 1, 1 ~ 7, 11* を参照。
- (10) アウグスチヌスは一般的には、«*cogitare*» という語を特定の意味に限定して術語化して用いているわけではない。彼の用語法は思索の文脈に応じて多様である。とはいえ明らかに註(9)などの箇所では特別の意味合いを持たせている。山田晶：同上書 p. 219の註(3)を参照。
- (11) cf. *Conf. III, 6, 10.* 特に心象については *Conf. X, 8, 12* 以下。
- (12) *Conf. VII, 1, 1. et vix dimota in ictu oculi ecce conglobata rursus aderat et inruebat in aspectum meum et obnubilabat eum, ut quamvis non forma humani corporis, corporeum tamen aliquid cogitare cogere per spatia locorum.....* この文の主語は「空想の群れ」。
- (13) *Conf. VII, 5, 7. et constituebam in conspectu spiritus mei universam creaturam, quidquid in ea cernere possumus, sicuti est terra et mare et aer et sidera et arbores et animalia mortalia, et quidquid in ea non videmus, sicut firmamentum caeli insuper et omnes angelos et cuncta spiritalia eius, sed etiam ipsa, quasi corpora essent, locis et locis ordinata, ut imaginatio mea,*
- (14) *Conf. VII, 1, 1....., quoniam quidquid privabam spatiis talibus, nihil mihi esse videbatur, sed prorsus nihil, ne inane quidem, tamquam si corpus auferatur loco et moneat locus omni corpore vacuatus et terreno et humido et aereo et caelesti, sed tamen sit locus inanis tamquam spatiosum nihil.*
- (15) *Conf. VII, X, 2. Ego itaque incrassatus corde nec mihimet ipsi vel ipse con-*

spicuous, 「心が鈍り」という言葉は、イザヤ書 6, 10; マタイ福音書 13, 15; 使徒行伝 28, 27 にあるが、ここでも聖書的な意味が含意されている。

「心」cor は B.A. (13) p. 597 の註 2 によれば、感情の座ではなく、正しく深い思惟の座を意味しており、人間が真理を認識し、それに固着する場を意味している。「(心が) 鈍り」と訳された *«incrassatus»* は *«incrassare»* という動詞に由来する。この動詞は元来文字通りには「肥大する、増大する、成長する」の意味であるが、この文脈では、習慣的に *cogitare* することによって精神の内に様々の多くの観念が蓄積して心が肥ったため、心がその本来の機能を果たし得ない状態を意味していると思われる。

- (16) *Conf.* VII, 3, 5. *sublevabat enim me in lucem tuam, quod tam sciebam me habere voluntatem quam me vivere.* なおこの点に関する議論は *De Trin.* XV, 12, 21~22 に詳しい。
- (17) *De Trin.* XV, 12, 21 「それによって我々が自分が生きていることを知る認識は、内的認識である。」 *Intima scientia est qua mos vivere scimus,.....*
- (18) cf. *De libero arbitrio.* II, 3, 7; *De vera religione.* XXXIX, 73.
- (19) cf. *Conf.* X, 5, 7
- (20) cf. *De Trin.* XIV, 6, 8. 「それ故精神の直観は精神の本性への何らかの関わりである、ということになる。」 *Proinde restat ut aliquid pertinens ad eius naturam sit conspectus eius,..... (eius は二つとも mens を受けている。)*
- (21) *Conf.* VII, 10, 16. *Et inde admonitus redire ad memet ipsum intravi in intima mea duce te..... Intravi et vidi qualicumque oculo animae meae supra eundem oculum animae meae, supra mentem meam lucem inconmutabilem, ... et qui novit eam, novit aeternitatem.*
- (22) *Conf.* VII, 20, 26. *Sed tunc lectis Platonicorum illis libris posteaquam inde admonitus quaerere incorpoream veritatem.....*
- (23) *Conf.* VII, 17, 23. *quaerens enim, unde adprobarem pulchritudinem corporum sive caelestium sive terrestrium et quid mihi praesto esset integre de mutabilibus iudicanti et dicenti: «hoc ita esse debet, illud non ita», hoc ergo quaerens, unde iudicarem, cum ita iudicarem, inveneram inconmutabilem et veram veritatis aeternitatem supra mentem meam conmutabilem.*
- (24) cf. 今道友信『同一性の自己塑性』p. 347 以下。
- (25) cf. *Conf.* X, 13, 34. *De vera religione,* XXXIX, 73 及び *De libero arbitrio,* II, 12, 34.
- (26) cf. *De vera religione* XXXIX, 72.
- (27) *Conf.* VII. 10. 16,, *sed superior, quia ipsa fecit me, et ego inferior quia*

factus ab ea. (ipsa と ea とは lux inconmutabilis を受ける。)

- (28) *ibid.* et cum te primum cognovi, tu assumisti me, ut viderem esse, quod viderem, et nondum me esse, qui viderem. cf. B.A. (13) p. 616 の註及び山田晶『在りて在る者』哲学研究第524号参照。 *Conf.* VII, 10, 16 の解釈についてはこの論文に負う所が多い。
- (29) *ibid.* et reverberasti infirmitatem aspestus mei radians in me vehementer, et contremui amore et horrore: et inveni longe me esse a te in regione dissimilitudinis,..... B.A. (13) p. 689 の註及び山田晶『在りて在る者』(上掲) p. 457-458 の註(9)参照。
- (30) *ibid.*..... tamquam audirem vocem tuam de excelso: «cibus sum grandium: cresce et manducabis me. nec tu me in te mutabis sicut cibum carnis tuae, sed tu mutaberis in me.»
- (31) *ibid.* et cognovi, quoniam pro iniquitate erudisti hominem et tabescere fecisti sicut araneam animam meam, et dixi: «numquid nihil est veritas, quoniam neque per finita neque per infinita locorum spatia diffusa est?» et clamasti de longinquo: immo vero ego sum qui sum.
- (32) *ibid.* et audivi, sicut auditur in corde, et non erat prorsus, unde dubitarem faciliusque dubitarem vivere me quam non esse veritatem, quae per ea, quae facta sunt, intellecta conspicitur.
- (33) *Conf.* VII, 11, 17, Et inspexi cetera infra te et vidi nec omnino esse nec omnino non esse: esse quidem, quoniam abs te sunt, non esse autem, quoniam id quod es non sunt. id enim vere est, quod inconmutabiliter manet.
- (34) *Conf.* VII, 12, 18~16, 22.